

山古志郷土玩具「木牛」づくりの 試み

A trial of handmaking traditional toy “mokugyu” at Yamakoshi

後藤 哲男¹

GOTO Tetsuo

広川 智子²

HIROKAWA Tomoko

キーワード：山古志、伝統玩具、牛の角突き、冬仕事
手仕事、継承

1. はじめに

平成 25 年 8 月、長岡市、山古志の虫亀宝物館³に木工
房が新設され、山古志の子供達に木工作業を伝えたいとい
う話が持ち上がった。虫亀区長を中心に山の暮らし再生機
構山古志サテライトの支援員の方々と長岡造形大学・後藤
研究室が知恵をしぼることになった。



写真 1 虫亀宝物館



写真 2 虫亀宝物館の木工房

始めに、子供達が作る木工作品案を検討してもらえない
かという話が後藤研究室にもたらされた。その後、虫亀宝
物館に展示されている「木牛」と出会い、「木牛」の伝統
と今なお制作している伝承者たちが子供のころ遊んだ玩具
として大事にしている想いに触れることになった。

山古志村は震災前から少子高齢化の波に洗われていた地
域である。9 年前の中越大地震では全村避難を強いられ復
興後の虫亀の帰村率は 7 割程度に止まっている。戦後の生
活環境の変化が自給自足的生活から都市部に仕事をもつ兼
業的生活環境に変化させた結果とみることもでき、震災を
契機に都市部に仕事を持つ成年層が都市部に居残った現象
とみることもできるのである。かつての山古志とは違い、
若年層は都市部に、高齢層は山古志に住まうという暮ら
しづりが定着しつつある。この現象は一見すると山間部の
過疎化と捉えられるのであるが、日々の農作業や祭りなど
の際には通える範囲での都市部暮らしという側面を持つ事
に留意する必要がある。したがって山古志地域で代々受け
継がれて来た「マキ」という血縁集団を基礎にしたコミュ
ニティは変化を余儀なくされた状況であり、無意識的にそ
の在り方自体の模索が始まっているとみることができる。
レポートは虫亀に伝わる郷土玩具「木牛」を通して木工教
育と地域の活性化に繋げるための取組みの一例であるが、
新しいコミュニティの在り方のヒントになるものが出来れ
ば有意義である。

2. 木工教室とその背景

虫亀宝物館の木工房で子供達が楽しみながら木工の技術
を習得して欲しいという発想は平成 23 年 2 月に作成され
た「安心して暮らし続けられる常住のむらづくり 復興デ
ザイン計画」⁴の議論の中から生まれている。

木工を通して子供達の造形教育をしようとする試みは現
在、雪国植物園の木遊館でも実践されている。⁵体験学習
で引率されてきた一クラスの児童は、シニアボランティア
のメンバーが用意した様々な材質と形の木っ端を使い、思
い思いの作業をして造形作品を作り上げている。



¹ 長岡造形大学教授

² 長岡造形大学研究員

³ 旧虫亀小学校の校舎を住民が集う場所や災害避難所、虫亀の紹介や民
具などを展示する施設として平成 25 年開館。

⁴ 山古志虫亀集落が発行した冊子

⁵ ジョイフル里山木工塾（長岡市が木遊館で実施している木工体験活動
の取組みのこと）長岡市 H P



写真3 木遊館の様子

子供達の自由な発想を応援することと、安全管理がそこでは求められている。

虫亀宝物館を最初に訪問した際に拝見した伝統的な玩具としての木の牛と鞠は、簡潔で力強いものであった。

元来子供に玩具として与える目的で作られてきた木牛はそれで十分完成されたものである。虫亀の木工房で子供が自分の手で工作するのであれば、自由な発想でアレンジすることが奨励され、大人の出番は安全管理優先になろう。伝統の継承を考えれば山古志における木牛づくりは単に子供達の造形力向上の試みではない側面が見いだされなくてはならない。



写真4 虫亀宝物館に展示されている木牛



写真5 虫亀宝物館に展示されている鞠

3. 社会的、時代的意義

山古志地域の「牛の角突き」は昭和53年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。現在では小千谷闘牛場で七場所、山古志闘牛場で十一場所が開催される。

牛の角突きの起源や由来に関する記録的資料は存在しないといわれているが、⁶よく引用される江戸時代の戯作者滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」の一節「当国古志郡二十村には、毎年三、四月の頃、或は丑の日、或は寅の日の吉辰を卜定め、角突きと唱える闘牛の神事であり、今茲は隔明日興行す」とのくだりである⁷。滝沢馬琴が生きた時代、山古志の牛の角突きの評判は江戸にまで及び、江戸時代の後期には江戸で角突きの興業も行うようになっていた⁸。馬琴は1818年に「北越雪譜」の鈴木牧之への手紙で興味を持ったことを述べ、その様子が見える図を依頼したという。

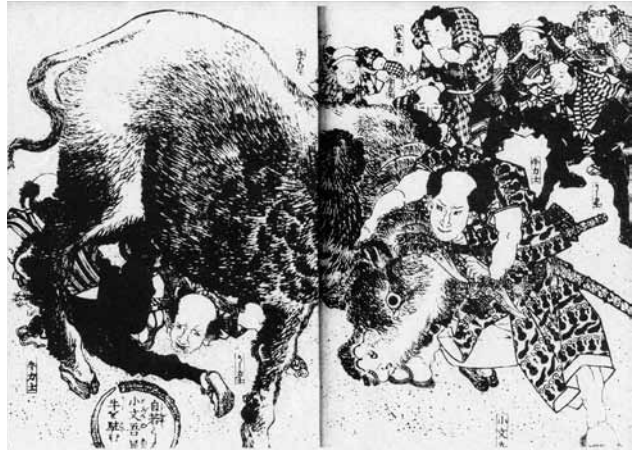


写真6 滝沢馬琴『南総里見八犬伝』闘牛図⁹

依頼を受けた鈴木牧之は1820（文政三年）魚野川を下り片貝に一泊して山古志を訪れている。その片貝に残る奉納木遣りは片貝が幕府の天領となった1786（天明6年）¹⁰

⁶ 山古志村史通史 P269～971 参照

⁷ 山古志村史通史 P972 参照 南総里見八犬伝は1814年～1842年の作品

⁸ 山古志村史通史 P269～271 参照

⁹ 長岡市指定文化財、山古志支所蔵「山古志村史」参照

¹⁰ 「年表小千谷」渡邊三省著 昭和59年8月によると1618年に片貝、高梨は長岡藩に、1647年片貝村の三分の一が高田領・新料、長岡領・古料と呼ぶ。1701高田領が佐倉藩領となる。1703長岡領片貝が幕領（出雲崎代官管下）、1723佐倉藩の稲葉氏が山城淀藩となり、新料が淀藩領となる1786淀藩領が幕領となる。1791出雲崎代官所から脇之町代官所管下となり、片貝は統一される。

に江戸に倣って組織された火消し組の流れをくむものとされ、その歌詞が山古志の盆踊り歌としても伝承されている（糸屋の娘の歌詞）。文化の伝承経路として天領の片貝はこの地域において一定の役割を持っていたことがわかる。文化文政期に入ると、江戸の庶民文化が花咲くが、見世物興業が江戸庶民の娯楽の対象となった。このような時代背景に、柏崎の女谷の『綾子舞』の一座が1808年と1834年に江戸での勧進興業を実現している。山古志の牛の角突きを担っていた人々にも同様の思惑が働いたことになる。女谷は片貝から見て山一つ隔てた海側の集落、山古志は内陸側に山一つ隔てた集落の位置関係である。明治の1876年には山古志の牛30頭が東京で角突き興業をしたことが記録されている¹¹。本来は神事であった角突きが文化文政期から明治にかけては見世物的要素も併せ持つことになっていた。

かつて農耕と荷役に欠くことの出来なかった牛はそれぞれの家で大切に飼育されてきた。祭りには家を代表して出場した牛が、神社を背景に角を突き合わせ、闘いを奉納する。その行事に居合わせたものは厄災から身が守られるとされ、家の子が強い子に育ってほしいという願いを牛に託してきた。¹² この「牛の角突き」は数百年、山古志で受け継がれてきたが、昭和30年代の後半には牛が機械に置き換わった結果、この伝統を維持することは困難になった時期もあった。



写真7 虫亀の牛の取組決め（昭和30年）

写真7は昭和30年の様子である。¹³「当日集まった牛の顔ぶれや力量を見て、牛主、若い衆たちが輪になって話し合いで取り組みを決める。成立すると両手を上げて三回手を打つ。正面の栈敷席は来賓や祝儀客の席、一般見物人は段々の地形に腰を下ろす。一般客の上部に虫亀の鎮守、諏訪神社がある。危険防護柵もなく、見物料は口ハ（無料）である。」と紹介している。

¹¹「山古志村史 通史」P345 参照

¹² 昭和20年以前は年4回の開催：田植え前後、蚕棚を払う7月20日前後、お盆、秋の彼岸の頃。

¹³ 参考文献「保存版ふるさと長岡」2009年発行、発行人：神津良子、発行所：（株）郷土出版社のP174参照



写真8 虫亀闘牛場（昭和37年）

写真8は昭和37年の様子である。¹⁴「昭和35年をピークに闘牛の牛は減少して一時は途絶えたものの、村人の熱意から昭和49年には山古志村闘牛飼育組合が発足して復活した」と紹介されている。



写真9 山古志闘牛場（平成25年）

最近ではこの「牛の角突き」を見学に訪れる観光客も増え、一大イベントとしてこの地域を活気づけている。我が国の中山間地のなかでも注目すべき特徴をもった地域である。

4. 牛の角突きと玩具

虫亀地域にも闘牛場があり神聖な祭事として牛の角突きが伝えられていた。木牛は集落の子供の成長を願う玩具として、今日まで伝わっている。60、70代の人々は木牛で遊んだ記憶を持つが、40代ではそれが曖昧になっているという。

写真10の、昭和44年の「郷土玩具②木」（牧野玩太郎著）にはこの牛の角突きの玩具が郷土玩具として紹介されている。

¹⁴ 参考文献「写真アルバム長岡市の昭和」2013年10月10日発行 発行者：佐々木高史、発行所：（株）いき出版のP274参照



写真 10 「郷土玩具②木」の表紙と掲載写真

童具作家の和久洋三氏は昭和 49 年の「保育の友」¹⁵ という雑誌の中でその由来について解説している。それによると昭和 10 年代に小栗山の宝林寺の住職の春日礼智さんが伝統的な子供の玩具を改良して郷土の土産ものとし、世に送り出したのが民芸品としての始まりとしている。(写真 11)

現在では小千谷東山のミニ面綱の会が製作販売する「木牛」がある。



写真 11 「おもちゃから童具へ」の表紙と掲載写真

5. 木牛の子供達や地域に対する効果

平成 25 年 8 月の第 1 回の打ち合わせから現在まで「木牛」の未来について話し合いを重ねてきた。

大きく分けて以下の 3 つの側面がある。



写真 12 話し合いの様子

(1) 子供達に郷土玩具を継承させる

第一に虫亀宝物館の木工房で子供達が木牛を製作するこ

とになれば、地元には伝わる郷土玩具を知り、身近にすることが出来る。そこでは子供達はものづくりの楽しさを知る機会を得、木工作業に習熟し、伝統の継承者となる。

(2) 住民の伝統継承意欲を高めつつ、冬仕事も提供する

今までは無意識の内に実行されてきた伝統継承を顕在化させる効果がある。木牛を製作する大人達に伝統の継承者の自覚が芽生える。旧虫亀小学校は虫亀地区の中心に据えられ、虫亀宝物館に変わっても、災害時には避難する場所として役割を担い、地区の中心施設として機能している。そこに『木牛』づくりの拠点が出来ることにより、内外の人々に足を運んでもらう機会を更に増やすことに繋がる。

また雪に閉ざされる数ヶ月間の冬仕事としての木牛と面綱作りは現金収入の道も拓ける。

厄災から身を守り、子供には強く育てほしいという願いが込められた木牛を新年に新調し縁起物として飾るといふ新しい習慣を提案するのも良い。



図 1 虫亀集落

(3) 観光客に闘牛の記憶を蘇らせる

国の重要無形民俗文化財である「牛の角突き」を目指した観光客は年々増加の傾向にある¹⁶。その観光客に木牛を山古志の郷土土産とし提供する。木牛を持ち帰り手に取り人に贈ってもらうことで、虫亀を思い出してもらい、山古志ファンの再訪や新しい訪問者が期待される。また山古志の人々が木牛に託した願いと同様の願いを観光客も願い、大切に飾ることも考えられる。

以上の効果を狙い、木牛を通して虫亀の大人たち、子供達、観光客が結びつけられ、相乗効果が期待できる。

6. 「木牛」づくりでの提案

伝統的な木牛は、虫亀の桐材を中心にケヤキやブナなどで製作される。¹⁷ 前出の本に取り上げられている従来のも

¹⁵ 新潟県HP観光統計情報の「GWにおける県内観光動向について」では牛の角突き(市町村や市町村観光協会等から聞き取り、小千谷市・長岡市)にてH23入込0.5万人、H24入込0.5万人、H25入込0.7万人と増加傾向にある。

¹⁷ 東山ミニ面綱会の木牛は杉製

¹⁵ 「おもちゃから童具へ」和久洋三著 昭和 49 年 P193～194 参照

のは、半割の丸太（主に杉）の前方をシンプルに斜めに切り牛の頭を模し、小枝で角を表現し、面綱をかけたものである。和久洋三氏によると、角を強制的に曲げ、土産物として整えられたのが昭和10年代とのことである。子供の遊び道具として存在していた時は、面綱などはついていない荒々しいものであったことが想像できる。

虫亀宝物館で最初に目にした木牛は写真13のような状態であった。この形を原型に虫亀の木牛伝承メンバー3名と長岡造形大学・後藤研究室が共同でアイデアを提案しながらそれぞれ試作することとした。

後藤研究室では虫亀宝物館の木工房を拠点として虫亀の集落で製作することを考え、従来のものから少し小型化し、玩具としての要素も加えることとした。



写真13 従来の木牛（虫亀宝物館提供）



写真14 大学の研究室で制作の様子

(1) 木牛本体の製作

基本的な大きさは小3cm角×6cm、中4cm角×8cm、大5cm角×10cmの三種類とした。さらに大きなものをつくる場合は底面の1辺の2倍の長さの大きさとした。材料は基本的に桐材、その他にブナ、樺、楓などがある。

①加工

まず鼻の大きさを決定する。底面の三分の一の正方形を鼻と見立て、頬の角度を30度、額の角度を45度として鼻の三辺を定規として昇降盤でカットする。

②牛の筋肉の締まりを表現する

額の部分と、胴部分のくびれ具合をサンダーで削り表現する。そこに求めるのは胴体のくびれで強調する盛り上がった背中とその筋肉が、体全体に迫力をもたらすことである。



従来

切り込み

写真15 額の違い

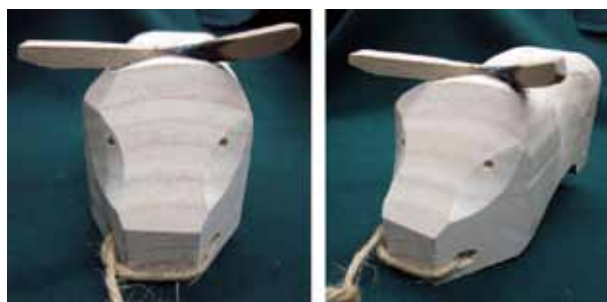


写真16 目がある木牛

③前傾姿勢と足

地面に接する面は後ろ足と前足を連想させるように斜めにカットし、前傾姿勢を作った。この前傾姿勢で角突きの際に力が入る牛の姿を想起できるようにした。



写真17 足を表現



写真18 足をつけた木牛

④牛の角

牛の角は個性豊かである。前掲の書物に取り上げられた伝統的な木牛の角は実に立派なものとなっている。原則的に小枝でできており、自然の持つ荒々しさと迫力を加えている。

童具作家の和久洋三氏によると「伝統的にはイチョウの枝の丸太をナタで切り削り、小枝で角を付け、これに赤・白・黒の布で注連縄の如きものを作り付けた素朴で力強いこの童具は、今（昭和49年）から三十年程前、小栗山、宝林寺の住職、春日礼智さんが郷土のみやげものとして世に出したのが民芸品としての始まり。」¹⁸とされている。春日さんが工夫した点は、角の細い材をお湯で温め、熱して曲げたところと面綱の豪華さということである。今回の試作ではこれに倣い、一本の小枝を水に浸し、ろうそくの火で炙って曲げる方法で角を作ってみた。試作では小枝や板材から切り出した線材を曲げている。また面材を削り出す方法も試したが、自然味あふれた小枝を利用する魅力は捨て難い。

(2) 玩具の要素

新潟の三条や巻、新発田には鯛車という伝統玩具がある。子供達がお盆の時に鯛車を引いて墓参りをする風習があるため、竹ヒゴでかたどられ紙を貼った鯛に車を付けて引き回せるようにしてあるのである。

子供が遊ぶ時、引き回せることに非常に魅力を感じるはずであり、車輪をつけることを試行してみた。

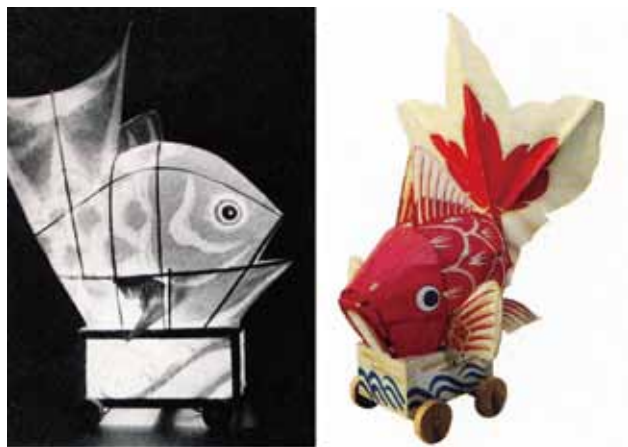


写真19 三条、鯛車・新発田、金魚台輪（鯛車）¹⁹

① 自転車式車の配列型

中心線の前後に車輪を取り付け、前のめりの角突きの時の姿に近づけた。後輪が牛の尻尾にも見える。この自転車スタイルの利点は車が外からは見えないため従来の木牛の姿を維持できること、走らせると体を揺らしながら突進する牛を連想できると考えた。最も小さな3cmのものには前輪を省略している。



写真20 後輪1つ小さな前輪一つ



写真21 前輪、後輪1つ

② 外側に後輪を2つ配列

より安定走行を実現させるため後ろ足に相当する部分の外側に二つの車輪を外側から取付けた。前輪は一つの三輪車型とした。

これは引っ張った時の安定性はあるものの外見は玩具的要素が強くなり、伝統的な郷土玩具の精神からは逸脱するように思える。しかしながら、子供がこれを選択するなら選択肢の一つとしてはあり得る。



写真22 外側に後輪2つ

¹⁸「おもちゃから童具へ」和久洋三著 昭和49年 P193～194 参照

¹⁹写真左：「郷土玩具①紙」牧野玩太郎・稲田年行著 昭和44年 P47 参照 写真右：「ふるさと玩具図鑑」井上重義著 2011年8月 P50 参照



写真 23 中央に小さい車輪

(3) 大きさ

従来（7cm角×15cm位）から小さいサイズで三種類（大・中・小）を提案した。持ちやすさ、手軽さを考慮して小さくした。



写真 24 3種類の大きさ

(4) 面綱²⁰の色

よくある面綱は赤、白、紺（黒）の3種類であるが、ピンクや水色、緑色など様々な色の組合せを楽しめるようにした。子供達が自分の好きな色の組み合わせから、更に愛着へと繋がる。また、お土産として買い求めようとする人には選択のバリエーションを与えることができる。生地段階から色を選べるようにすることにより、選択の自由度がさらに拡大し、購入者のオーダーメイドに近い組合せが可能となる。自分だけの木牛を持ち帰る楽しみを添えている。



写真 25 面綱の色が青系統や赤系統

7. 虫亀地区の復興から発展へ

(1) 子供達への貢献

① 子供達が木牛を知る意味

従来の木牛をアレンジして様々な種類を誕生させ山古志の子供たちに木牛への更なる関心を持ってもらいたい。また、生まれ育った山古志地域に伝わる玩具を通じて祖先や祖父や父親の子供時代の遊びの空間を共有し、丈夫に育って楽しく遊んでくれるよう願う親の気持ちを未来に伝えることもできるのである。玩具の形を整え地元の魅力のサステナビリティが確保できる。

② 山古志の子供へ手仕事を伝承する

子供の発達において、手仕事をたくさんさせることは、重要である。山古志では昔から手作りによる民具が生活の道具として使われており、日常的に子供達は大人達にならって自然と手を動かしていたのである。ところが山の子供も町の子供と変わらない生活となった今、手仕事の面白さを実体験できる機会は山古志でも激減している。

この木牛の復活と木工房の創設は、この流れを食い止め、山の子供達の生活に一石を投ずるものとなる。集落の外から訪れる親子連れも期待出来る。

木工作業は高速の機械を使用するため、かなりの危険を伴うことになるが、安全管理をする大人がそれに関わることで、世代間の交流も生まれる。子供達が大人になった時には次の世代に同じように伝えることが可能となる。

(2) 地域に対する貢献

① 山古志の社会構造

山古志には「マキ」と呼ばれる本家・分家関係で結ばれた血縁集団がある。²¹ この「マキ」により虫亀地区の生活領域の土地の所有状況が報告されている。²² それによると虫亀地区は大きく分けて12のマキ集団で構成され、10の小字に分かれている。各マキの所有する土地は山林、水田、ため池、畑、原野でバランスよく構成され、安定した生産

²⁰ 面綱とは、牛の顔につける綱である。この綱は牛の遊動に際し、牛の鼻の保護も考え鼻縄と共に必要な用具である。山古志村史通史 P984 参照

²¹ 『ふるさと山古志に生きる一村の財産を生かす宮本常一の提案―』山古志村写真集制作委員会 2007年4月 社団法人 農山漁村文化協会 P19

²² 前掲書

と同時に建築材や薪炭類、家畜の餌など、生活資材安定供給に適切に土地利用が安排されているという。²³ このマキが所有する一塊の水田の水の供給システムはほぼそのマキで完結しているのである。そのため、^{えざら}江浚いのような水の管理は原則として「マキ」単位で行われていたことが推察されるのである。

水源を得るための横井戸の建設や新田の開発、棚田の修理なども同様である。またマキの日常生活での役割は一族の冠婚葬祭の際のしきたりに現れており、村のコミュニティ維持に威力を発揮している。²⁴ 村の生活の維持において、マキの領域を超えるような大規模な事業、例えば村間の隧道の手掘り建設や道普請、村をあげての祭りのような場合は取り纏め役としての区長がそれを差配するシステムとなっているようだ。この場合、各マキの代表者による推薦が区長選定の重要な要素であろう。

このような社会構造が今なおしっかりとしている虫亀において、新しい試みを導入することは大変な作業になることはまちがいない。

② 木牛をどのような位置づけにするか

木牛の試作品、第一弾として10種類以上を制作した。虫亀区長を中心に山の暮らし再生機構山古志サテライトの支援員の方々が協力して、平成25年10月23日にお披露目し虫亀の住民の方からアンケートを行った。

同年11月「蕎麦祭り」にて第二弾の試作品を今までの経緯の紹介パネルとともに展示した。希望者には木牛の販売も実施してみた。少しずつ虫亀の住民や観光客に活動を伝えてみているのが現状である。

山古志の生活は自給自足を原則とする自己完結型の生活を数百年続けて来たのであるが、戦後の生活スタイルの変化と中越大震災により、少子高齢化の現実直面している。村の神事であり、数少ない娯楽であった牛の角突きは昭和38年に一端途絶え、昭和50年に山古志観光協会により復活したという経緯がある。さらに牛の角突きを歴史的にみると、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」以来、明治に入ると牛の角突きは娯楽性、興業性を帯び、明治9年には東京興行も打った。明治政府はその華美な傾向に対して注意を喚起したほどである。²⁵ 昭和53年に国の重要無形民俗文化財に指定されることになるのだが、この頃から、他地域の人々に山古志の牛の角突きが再び認知されるようになってきた。全国で闘牛を文化としている地域が連合して闘牛サミットも開催され次回は山古志が開催地となっている。

一方道路の整備と日常生活の変化により、錦鯉で成功している場合はあるが、概ね専業農家では成り立たなくなっている。山古志の人々は兼業農家として存続し、主たる収入を山古志以外で求める傾向が主流となる。若者の村内での就労のチャンスは少なく、少子高齢化への傾向に益々拍車がかかる状態となっている。このような状況の中で、観光の目玉の牛の角突きは大切な資源のひとつである。

²³ 前掲書 P20

²⁴ 『山古志村』[宮本常一と見た昭和46(1971)年の暮らし] 須藤功著 2005年10月 社団法人 農山漁村文化協会

²⁵ 山古志村史 通史 P345

神事でもあり、観光の側面も強調されることになる。

③ 活動の場としての旧虫亀小学校

旧虫亀小学校の虫亀宝物館は、子供たちの勉強の場として様々な側面で活用されようとしている。虫亀宝物館の前身は山古志村民俗資料館²⁶でもある。山古志村民俗博物館(旧池谷小学校第二校舎、住所は山古志村南平)とは、地域文化の重要性和地域の文化財を大事にしていこうという雰囲気の中²⁷で昭和47年に民具収集活動が行われ昭和50年に開館した。平成16年の新潟県中越地震で被災したが県内三か所(新潟市の県文化財所蔵館、柏崎市の旧鶴川小学校、山古志・旧虫亀小学校)に民俗資料を分散避難した。避難していた民俗資料は平成19年に旧鶴川小学校から返却され、陳列棚の整理や台帳が整ったことから9年ぶりに新潟市の県文化財所蔵館から運び出され平成25年11月に虫亀宝物館で全て揃った。²⁸ 昭和初期からの農具や民具約2000点は今後、地元の子供たちの学習教材として活用、保管される予定だ。

この宝物館が活動の拠点となる。木工房もまた子供たちだけでなく、木牛を作り続けたい住民達の製作場所ともなる。木工機械の充実や作業環境など今後も充実した場所づくりが求められる。

④ 虫亀宝物館の活用

開館したばかりの虫亀宝物館であるが被災した虫亀宝物館は山古志村民俗博物館の意思も引き継ぎ、住民から集めた民俗資料を展示する要素も加わった。また、旧小学校の建物を活用し災害避難場所としても利用できる。

体育館ではゲートボール会場として活用され山古志の写真展示など多様化した施設として誕生し、山古志中の人達にも活用してもらえる施設となった。

また、木工房が新設されたことで、今後、子供の制作時に親や祖父母の見学や作品を見にやってくるだろう。定期的、子供たちが制作した木牛が一堂に集まる作品展の開催も可能である。

⑤ 新たな冬仕事

子供の木工作業で制作した木牛は子供たちが持ち帰ることが基本である。

また木牛を希望する人にはお土産として制作したものを手渡すこともできる。

大人の作る木牛は希望者には販売もできる状況が望ましい。木牛の製作には山古志の長い冬の冬仕事としての時間が割り当てられ、冬の労働を換金できることが望ましいのである。以前は藁の蓑や笠など冬仕事として制作していたが、木牛も冬の間に作りため、春からの「牛の角突き」の会場など様々な場面で紹介、販売し、運営の自立や兼業農家の現金収入の一助となれればと考えている。

²⁶ 山古志村民俗資料館と収蔵民具(飯島康夫著[新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野]) 参照

²⁷ 宮本常一(日本の民俗学者)が山古志とのつき合うのは昭和39年からで、昭和46年、昭和53年と足跡がある。

²⁸ H25.11.13 新潟日報朝刊、第16面にて掲載記事参照

(3) 観光客へ

① お土産

地元の人達（木牛の伝承者など）が制作した木牛を記念に欲しいという人にはお土産という形で販売する。地元の雑木を使って、様々な種類を用意し、郷土玩具としての意味や想いも一緒に紹介しながら販売できると物だけの販売だけでなく歴史や郷土もお土産として伝えることができる。また、子供や孫の誕生のお祝いに「丈夫で健康に育つよう」木牛に想いを託しプレゼントする可能性もある。

② 木牛部品の準備－プレゼンテーション

宝物館や出張した先でプレゼンテーションすることを考えてみた。パーツを箱にきれいに並べたものを製作した。それぞれ大中小の規格の牛の体、小枝からできた角、車輪とその軸を用意する。牛本体は車輪が付けられるように溝を掘ったものと足の表現だけをしたもの2種類とする。面綱は各色取り揃え、布の状態のものから、編み込む前の状態まで加工したもの、三色をより面綱として完成しているものも用意し、2つの箱（900×450×72）に収納する。その箱は土産ものとして露店で販売したり、宝物館で展示販売する時の陳列棚となる。（写真26参照）



写真 26 箱に収納した木牛



写真 27 蕎麦祭りでの木牛お披露目

10. 「木牛」の今後の発展

少子化で虫亀の子供達も少なくなった。かつてのように大人が一つ一つ大きいものから小さいものまで心を込めて木牛を制作し、子供達が誇いで乗ったり、闘牛ごっこをし

たり工夫して遊ぶ姿は今日ではほとんど見られない。子や孫に木で玩具を作ってやることも忘れ去られようとしている。

虫亀宝物館の木工房は昔遊んだ木牛や鞠を作る技術を持った世代が維持して行く場所になる。「木牛」製作を通じて子供達ばかりではなく、全国津々浦々から牛の角突きを観に来た人々と新たな繋がりを作る希望を後藤研究室は共有したいと考えている。

11. まとめ

木牛製作を通して子供たちの木工教育、木牛の伝承と郷土土産、自生する桐をはじめとした雑木を材料とした雪多い数ヶ月間の新たな冬仕事の細工物に可能性が見いだせる。

山古志には自給自足の農業を基盤に、兼業で様々な仕事に従事する人が多くいる。他の地域の人々に対してはもてなす精神の旺盛な、豊かな山の生活者のコミュニティである。

地域に根付く玩具の製作と提供は、このコミュニティを強固に維持し続けるためのきっかけとなる。

12. 謝辞

平成25年度、本研究を行うにあたり山古志虫亀区長、木牛伝承者の方々、山の暮らし再生機構山古志サテライトの支援員の方々、皆さんと木牛を通じて大変有意義な話し合いを行う事ができました。

また、長岡造形大学、後藤研究室所属3年生の関川遼太郎さん、近善晴さん、倉本裕子さんの協力なくして本研究は進行できませんでした。ここにお礼申し上げます。

後藤 哲男

参考図書

- 「山古志村誌－資料一－」山古志村誌編集委員会 昭和56年7月
- 「山古志村誌－資料二－」山古志村誌編集委員会 昭和56年7月
- 「山古志村誌－民俗－」山古志村誌編集委員会 昭和58年7月
- 「山古志村誌－通史－」山古志村誌編集委員会 昭和60年10月
- 「小千谷市史－上巻－」小千谷市史編集委員会 昭和44年11月
- 「小千谷市史－下巻－」小千谷市史編集委員会 昭和42年12月
- 「年表小千谷」渡辺三省編集者代表 昭和59年8月
- 「片貝木遣歌考」片貝伝統芸能保存会編 平成9年9月
- 「写真集 山古志村 宮本常一と見た昭和46年（1971）年の暮らし」須藤功著 2005年10月
- 「ふるさと山古志に生きる－村の財産を生かす宮本常一の提案－」山古志村誌編集委員会 2007年4月
- 「花火に熱狂する片貝」渡辺三省著 平成4年8月
- 「ふるさと玩具図鑑」井上重義著 2011年8月
- 「郷土玩具①紙」牧野玩太郎・稲田年行著 昭和44年
- 「郷土玩具②木」牧野玩太郎著 昭和44年
- 「おもちゃから童具へ」和久洋三著 昭和49年
- 「山古志村民俗資料館と収蔵民具」飯島康夫著 新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野